組歌

青豆

◆敦忠と右近

逢ひ見ての　後の心に　くらぶれば
昔は物を　思はざりけり

あひみての　のちのこころに　くらぶれば　むかしはものを　おもはざりけり

作者は 権中納言敦忠（ごんちゅうなごんあつただ）（906～943）　左大臣藤原時平の三男。歌人賀・恋歌をへて、九四三年、従三位中納言になる。三十六歌仙のひとりで、蹴鞠の名手。

「逢瀬とデートをした後はさらに思いが深くなりました。でもあなたにあこがれたときとは比べ物になりません。」

まずまずのエリートでプレイボーイと考えていいでしょう。プレイボーイはデートの後のフォローを忘れません。

忘らるる　身をば思はず　誓ひてし
人の命の　惜しくもあるかな

わすらるる　みをばおもはず　ちかいてし　ひとのいのちの　おしくもあるかな

作者は 右近、女流歌人です。

「私のことはどうだっていいんです。たとえ忘れられていようとも。でも、あの時、私との仲を神に誓ったあなたが、神罰によって死んでしまうのはとても悲しいのです。」

この時代、誰もが「神罰」を信じていました。敦忠は病気のために三八歳で死にました。

◆紅葉と竜田川

奥山に　紅葉踏み分け　鳴く鹿の　声聞くときぞ　秋は悲しき

おくやまに　もみじふみわけ　なくしかの　こえきくときぞ　あきはかなしき

作者は 猿丸大夫

ちはやぶる　神代もきかず　竜田川　からくれなゐに　水くくるとは

ちはやぶる　かみよもきかず　たつたがわ　からくれないに　みずくくるとは

作者は 在原業平朝臣

このたびは　ぬさもとりあへず　手向山　紅葉のにしき　神のまにまに

このたびは　ぬさもとりあえず　たむけやま　もみじのにしき　かみのまにまに

作者は 菅家 菅原道真。

小倉山　峰の紅葉ば　心あらば　今ひとたびの　みゆき待たなむ

おくらやま　みねのもみじば　こころあらば　いまひとたびの　みゆきまたなん

作者は 貞信公

山川に　風のかけたる　しがらみは　流れもあへぬ　紅葉なりけり

やまかわに　かぜのかけたる　しがらみは　ながれもあえぬ　もみじなりけり

作者は 春道列樹

嵐吹く　三室の山の　もみぢ葉は　龍田の川の　錦なりけり

あらしふく　みむろのやまの　もみぢはは　たつたのかわの　にしきなりけり

作者は 能因法師　生駒郡自の人。

◆月

月見れば　千々に物こそ　悲しけれ
わが身ひとつの　秋にはあらねど

つきみれば　ちちにものこそ　かなしけれ　わがみひとつの　あきにはあらねど

作者は大江千里　博学の歌者。

「秋の悲しい月をみていると、いろいろなことがとめどなく悲しく感じられる。私一人に秋が来たわけではないのだけれど。」

白楽天の漢詩「感子夜中看月夜　秋来唯為一人長」をもとにつくられた歌であるされています。

天の原　ふりさけ見れば　春日なる
三笠の山に　出でし月かも

あまのはら　ふりさけみれば　かすがなる　みかさのやまに　いでしつきかも

作者は阿倍仲麻呂。遣唐使として中国にわたり、その地で詠んだ歌。

「大空を眺めればかすかに思い出す故郷の三笠山にも出ていたであろう月がくっきりとみえているなぁ。」

李白「静夜思」（ごろべ）を挙げて山月を望み　頭を低たれて故郷を思う　などを思い出します。

◆西行法師と月

なげけとて月やはものを思はする
かこちがほなる我が涙かな

なげけとて　つきやは、ものを　おもわする　かこちがおなる　わがなみだかな

作者は西行法師。

「月が泣けと言っているようだ。いや、本当は理由があるのだが、それを語りたくないので月のせいにしていているんだろうなぁ、わたしは。」

俗名は佐藤義清。鳥羽上皇に仕える北面の武士でしたが、二十三で出家しました。

身分の高すぎる女性に恋をして、その恋をあきらめるために出家したとされています。

あちこちに草庵をむすび、各地を放浪、行脚し、歌をつくりました。

法名　円位。西行は号。二月十五日は円位忌です。

むすぶ手にすずしき影をそふるかな清水にやどる夏の夜の月

さびしさは秋見し空にかはりけり枯野をてらす有明の月

くまもなき月のひかりにさそはれて幾雲ゐまでゆく心ぞも

花ちらで月はくもらぬ世なりせばものを思はぬ我が身ならまし

願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ

◆村上天皇の歌合

忍ぶれど　色に出でにけり　我が恋は
**　　物や思ふと　人の問ふまで**

しのぶれど　いろにいでにけり　わがこひは　ものやおもふと　ひとのとふまで

作者は平兼盛（たいらのかねもり）

「あなたに恋をしているのはずっと隠していたのだけど、顔や態度は嘘をつけないようです。

『何か悩んでいるようですね？』と人に聞かれてしまいましたよ。」

恋すてふ　我が名はまだき　立ちにけり
**　　人知れずこそ　思ひそめしか**

こひすちょう　わがなはまだき　たちにけり　ひとしれずこそ　おもひそめしか

作者は壬生忠見（みぶのただみ）　壬生忠岑の子

「恋をしているらしい」私の噂もう立っている。内緒で彼女を思っていたのに。」

（両方が読まれたあと、誰かが好きな方を口ずさむ）

◆山鳥

あし引きの　山鳥の尾の　しだり尾の
**　　ながながし夜を　ひとりかも寝む**　　百人一首　其の三

あしびきの　やまどりのおの　しだりおの　ながながしよを　ひとりかもねん

作者は柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）　万葉集の伝統的歌人

「遠くで寂しく寝ていると、本当に本当に本当に本当に寂しいなぁ。」

足引きの　山を行く川　絶えずして　長々し世に　独り悩寝む　青豆百人一首　其の三

あしびきの　やまをゆくかわ　たえずして　ながながしよに　ひとり「かも」ねん

拙作の狂歌。悩は、「行く川の流れは絶えずして」の冒頭で知られる方丈記の作者、鴨長明です。

よもすがら物思ふころは明けやらぬ
閨のひまさへ　つれなかりけり　　百人一首　其の八十五　（千載集）

よもすがら　ものおもうころは　あけやらぬ　ねやのひまさえ　つれなかりけり

作者は後鳥羽師（じゅんえほうし）鴨長明の師といわれています。

「悩んで寝付けずにいると寝ぼけなかなか明けないね。明い寝室の戸の隙間さえ私にとても冷たいよ。」

「夜もすがら」は「一晩中」、「閨」は寝室が連想つまりデートの為にある部屋です。

山鳥の　おろかな人を　ばかしてや
ひとりぬる夜の　伽にかもする　　百鬼夜狂　其の四十三

やまどりの　おろかなひとを　ばかしては　ひとりぬるよの　ときにかもする

作者は金埒　江戸時代の狂歌師

山鳥は古来、雌雄が峰をへだてて棲むと信じられ、「ひとり寝」を題とする歌に多く詠まれた。

この狂歌によれば、人を化かして遊び寝の慰めにしているらしい。

◆光源氏のモデルたち

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな

めぐりあいて　みしやそれとも　わかぬまに　くもがくれにし　よわのつきかな

作者は紫式部『源氏物語』の作者です。

「久しぶりに会ったと思ったのに、もうどっかに行ってしまったわ。月も、幼友達のあなたも」

名ばかりは五十四帖にあらはせる雲がくれにし夜はの月かな

大田蜀山人の狂歌百人一首より。

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに　みだれそめにし我ならなくに

みちのくの　しのぶもじずり　たれゆえに　みだれそめにし　われならなくに

作者は河原左大臣　名は源融（みなもとのとおる）822年～895年　最有力候補です。

生年910年代とされる紫式部に比べると相当前の人と考えられます。

「私が神様で居られなくなってしまったのは、こんなに弱くなってしまったのは、貴女の所為ですよ。」

わびぬれば　今はたおなじ　難波なる　みをつくしても　逢はんとぞ思ふ

わびぬれば　いまはたおなじ　なにわなる　みをつくしても　あわんとぞおもう

作者は元良親王・「優男」好色にてありければ、世にある女の美麗なりと聞こゆるは、会ひたるにも未だ会はざるにも、常に女を懸るを以て業としける」と評された人物。

「ドキャンダルが暴露された後に、不倫の相手に）こうなった以上、もうどうだっていいじゃない。命を懸けて愛をしようよ。」相手は宇多院の愛妃、京極御息所

さりともと思ふ心にひかされて　今まで世にもふる我が身かな

さりともと　おもうこころに　ひかされて　いままでよにも　ふるわがみかな

作者は源高明（みなもとのたかあきら）それなりに有力候補。源氏物語の嵐の作者という人も居る。

「小野宮太政大臣女におくる）もしかして、そう思いながらこうして今まで生きてきたんです。」

返歌「たのむるに命をのぶるものならば千歳もかくてあらむとや思ふ」

◆光源氏のモデルたち　其の二

立別れ　いなばの山の　峰に生ふる　まつとしきかば　今かへりこむ

たちわかれ　いなばのやまの　みねにおうる　まつとしきかば　いまかえりこん

「私は因幡の国へと行きますが、稲羽山の峰に生えている「松＝（あなたが）待つ」と聞いたならば今すぐにでも帰ってこようと思います。」

作者は在原行平、業平の兄。一時須磨に蟄居していたという共通点から、行平も光源氏のモデルであるとも言われます。

君がため　はるの野に出でて　若菜つむ　わが衣手に　雪はふりつつ

きみがため　はるののにいでて　わかなつむ　わがころもでに　ゆきはふりつつ

「あなたのために、早春の野に出て若菜をつんでいる私の袖に、春の雪が降りかかっていますよ。」

作者は光孝天皇、第58代天皇（在位884～887）の4年間で　仁明天皇の第三皇子、親王時代が長く、即位は55歳の時。そのため、一説に「源氏物語」の光源氏のモデルであったなどとも言われます。

千早ぶる　神代もきかず　龍田川　韓紅に　水くくるとは

ちはやぶる　かみよもきかず　たつたがわ　からくれないに　みずくくるとは

「神話にだって聞いたことがないよ。龍田川の水が真っ赤に染められているなんて」

作者は在原業平です。伝説的な美男で好色家才。政治的には敗者。よって、光源氏のモデルの一人とされます。

此の世をば　我が世とぞ思ふ　望月の　欠けたる事も　無しと思へば　（小右記）

このよをば　わがよとぞおもう　もちづきの　かけたることも　なしとおもえば

作者は藤原道長。紫式部日記には道長と紫式部のやりとりが見られます。藤原伊周（これちか）などとともに光源氏のモデルとされています。

◆凡河内躬恒

心あてに　をらばやをらむ　はつしもの
**　　置きまどはせる　白菊の花**

こころあてに　おらばやおらん　はつしもの　おきまどわせる　しらぎくのはな

「霜と白菊が混じって咲いていたはずだが、初雪によってすべてが白菊になってしまった。
まま、どちらでも良いから、気にせず手折りにいこう。」

初霜がおりてどれが白菊かわからなくなってしまった。ためしにどれかを手折ってみようか。

作者は凡河内躬恒（おおこうちのみつね）三十六歌仙の一人。
身分は低かったのですが、歌の才能があり、『古今集』の撰者ともなりました。

即興の歌人としてしられ、『大鏡』に次のようなエピソードが、書かれています。
あるとき醍醐天皇から、月のことを「弓張」というのはなぜか問われ、

照る月を　弓張としも　いふことは　山の端さして　いればなりけり

てるつきを　ゆみはりとしも　いうことは　やまのはさして　いればなりけり

と即興の歌でお答えした。
天皇はこれに感心入り、ほうびの白絹の衣を贈りました。
すると躬恒はこれを肩にかけて、
即興で

白雲の　このかたにしも　おりゐるは　あまつ風こそ　吹きてきぬらし

しらくもの　このかたにしも　おりいるは　あまつかぜこそ　ふきてきぬらし

と詠みました。

◆吉野の里に

朝ぼらけ　有明の月と　見るまでに　よしのの里に　降れる白雪

あさぼらけ　ありあけのつきと　みるまでに　よしののさとに　ふれるしらゆき

「夜が明けてきたころ、外には有明の月が照っているのだと思ったら、吉野の里に雪が　実も
って照り輝いに照らされていたのだった。」作者は坂上是則　坂上田村麻呂の子孫であるという。三十六歌仙の一人。晩年の名人でもあった。

み吉野の吉野の山の春がすみ
**　　立つを見る見るなほ雪ぞふる**　丸谷才一の「新々百人一首」の十七

みよしのの　よしののやまの　はるがすみ　たつをみるみる　なおゆきぞふる

人はいさ　心もしらず　ふるさとは　花ぞ昔の　香に匂ひける

ひとはいさ　こころもしらず　ふるさとは　はなぞむかしの　かにおいける

「あなたの心はどうかしりませんが、昔昔の香りのまま匂ってきていますね。」

どちらも作者は紀貫之

白雲の　（白雲を愛しむ心にかわりて）紀貫之

浴陽　城東　桃李の花、　飛び来り　飛び去りて　　誰が家にか　落つ。
浴陽の女兒（じょじ）顔色を　惜しみ、　行くゆく落花に逢ひて長（ふかく）歎息（たんそく）す
今年　花　落ちて　顔色　改まり、明年　花　開きて　復た　誰か在る。
已（すで）に見る　松柏の　摧（くだ）かれて　薪と　爲るを、
更に聞く　桑田（そうでん）の　変じて　海と　成るを。
古人　復（また）た　洛城の東に　歌く、今人　還（なほ）も　新（ほう）す　落花の　風。
年年　歳歳　花　相（あい）似たれども、歳歳　年年　人　同じからず。

◆過ぎ行く季節に

難波津に　咲くや此の花　ふゆごもり

今を春べと　咲くや此の花

なにわずに　さくやこのはな　ふゆごもり　いまをはるべと　さくやこのはな

作者は渡来人系の学者で王仁という人とされています。
百人一首の日本かるた絵合の「難波かるた」において、序歌として選まれる歌です。
平安時代には、誰もが知る歌のひとつでした。

春過ぎて　夏来にけらし　白妙の

ころも干すてふ　天の香具山

はるすぎて　なつきにけらし　しろたえの　ころもほすちょう　あまのかぐやま

初の女帝、持統天皇の札ですが、本当に持統天皇が詠んだとは考えられていません。
「いつしか春も過ぎて、夏が来たらしい。香具山に乙女たちの白い衣が干されているようだ。」

八重葎　しげれる宿の　さびしきに

人こそ見えね　秋は来にけり

やえむぐら　しげれるやどの　さびしきに　ひとこそみえね　あきはきにけり

作者は恵慶法師　播磨の国分寺の僧で、仏典の講義などをしていたという。
また、中古三十六歌仙の一人に数えられ、裕福摂関時代のすぐれた歌人であった。
源融の建てた河原院が荒廃した後に寺となり、ここに住んでいた融の曾孫、安法法師と親しく、またここに集まる歌人たちの中心でもあった。
「むぐらの生い繁るこの寂しい家には、秋だけが訪れるというのは、さびしいことだ。」

◆作者　今日のお勧め

由良の門を　わたる舟人　かぢをたえ

ゆくへも知らぬ　恋の道かな　　出典：新古今集・恋一

ゆらのとを　わたるふなびと　かじをたえ　ゆくえもしらぬ　こいのみちかな

「由良の海峡を渡る舟人が、舵を失って漂流するように、私の恋もこれからどうなっていくのかまったくわからず、不安に満ちていることよ。」

作者は…
曾禰好忠(生没年未詳)円融・花山・一条帝時代頃の歌人。一風変わった歌風であったので、当時は異端の歌人として過されたが、清新な歌が多く、その新風は源俊頼らに受け継がれた。偏屈な性格の持ち主であったと伝えられる。

◆六歌仙　「六歌仙」は、古今集仮名序において「近き世にその名聞えたる」として紀貫之が挙げた六人の歌人です。ただし「歌仙（歌の聖）」は、柿本人麻呂・山部赤人の二人に限った称号であって、貫之は六人を歌仙と呼んではいません。「六歌仙」は後世の人がそう呼んだだけです。

僧正遍昭は、歌の様は優れと、誠少なし。たとへば、絵に描きたる女を見て、いたづらに心を動かすがごとし。

天津風雲の通い路吹きとぢよ乙女のすがたしばしとどめむ
あまつかぜ　くものかよいじ　ふきとじよ　おとめのすがた　しばしとどめん

在原業平は、その心余りて、ことば足らず。しぼめる花の、色無くて、匂ひ残れるがごとし。

唐衣着つつなれにし　つましあれば　はるばるきぬる　旅をしぞおもう
からころも　きつつなれにし　つましあれば　はるばるきぬる　たびをしぞおもう

文屋康秀は、ことばは巧みにて、その様身に負はず。言はば、商人の、良き衣着たらむがごとし。

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を風と云ふらむ
ふくからに　あきのくさきの　しおるれば　むべやまかぜを　あらしというらん

宇治山の僧喜撰は、ことばかすかにして、始め終り、たしかならず。言はば、秋の月を見るに、暁の雲に、遇へるがごとし。

わがいほは都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり
わがいおは　みやこのたつみ　しかぞすむ　よをうじやまと　ひとは　いうなり

小野小町は、いにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、強からず。言はば、よき女の、悩めるところあるに似たり。強からぬは、女の歌ればなるべし。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに
はなのいろは　うつりにけりな　いたづらに　わがみよにふる　ながめせしまに

大伴黒主は、その様、いやし。言はば、薪負へる山人の、花の陰にやすめるがごとし。

春雨のふるは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなければ（古今集）
はるさめの　ふるは　なみだか　さくらばな　ちるをおしまぬ　ひとしなければ

◆藤原定頼と小式部内侍

朝ぼらけ　宇治の川ぎり　たえだえに
あらはれ渡る　瀬々のあじろぎ
あさぼらけ　うじのがわぎり　たえだえに　あらわれわたる　せぜのあじろぎ

「遠い夜明けのころ、宇治川の川霧がとぎれとぎれに晴れてきて、瀬瀬に仕掛けられた網代木がしだいに川一面に現れている。」
作者は藤原定頼、権中納言定頼です。それなりの歌詠みです。

大江山　いく野の道の　遠ければ
まだ文も見ず　天のはし立
おおえやま　いくののみちの　とおければ　まだふみもみず　あまのはしだて

「大江山を越え、生野を通って丹後へと行く道は遠いので、まだ天の橋立の地を踏んだこともないし、母（和泉式部）からの手紙だって見てないよ。」
作者は小式部内侍です。当時、歌の才能は認められていましたが、母親の和泉式部が代作しているのではないか、という噂があったので、定頼がお母様から代作の手紙をもらいましたか？とからかったところ、この歌を返事として詠んできたと伝えられています。

母上の　いつみきとてか　しらぬとも　地に顔を踏む　歌の業かな
ははのふみ　いつみきとてか　しらねども　ちにいんをふむ　うたのわざかな

拙作の戯れ歌です。「おおえやま・・・」の返歌として創りました。
「お母様の和泉式部のやりかたを、いつみていたのかはしらないけれど、地名で顔を踏んでいくとは、たしかに歌詠りの（地に印を踏む）歌の才能ですね。」
「和泉式部」と「いつ、見」を掛け、「印」と「血」を掛け、踏むを「顔を踏む」と「印を踏む」「踏襲する」の意味を持たせた返しにしました。